



カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852-8114
長崎市橋口町1-1
長崎大司教館内
Tel. 095-843-3869
Fax 095-842-4460
振替口座 01880-5-2699
発行人
山田 良 秋
印刷所
株式会社 インテックス

祈りの意向	祈禱の使徒
・教皇 ・日本	富がふさわしい方法で活用され、利己主義への誘いに屈することなく、常に共通善や貧しい人々との連帯が推進されるように日本と韓国の教会のために祈ります。さまざまな課題に取り組みながら、福音を証ししていくことができるように

被爆マリア像を携え

中村大司教ら米国へ平和巡礼

核禁止条約再検討会議に合わせ訪問

今年11月30日から12月4日にかけて米国ニューヨーク国連本部で開催される核兵器禁止条約の第1回再検討会議に合わせ、「核兵器のない世界のためのパートナーシップ」の設立母体の一つである長崎教区から、代表者が浦上教会の「被爆マリア像」を携え、広島教区の代表者ととも現地を訪問する。

長崎からは、巡礼団長の中村倫明大司教、高見三明名誉大司教、教区平和推進委員長の鍋内正志師をはじめとする計10人が参加。11月26日(木)に長崎を出発し、広島からの一行と合流して渡米。現地では同じくパートナーシップ設立母体のアメリカのメンバーであるサンタフェ・ハッタン計画国立歴史公園、ア

2028年10月 教会総会に向けて`ともに歩む`

滑石教会 助任司祭 稲田伸也



9月1日から3日にかけてタイにおいて開催された、FABC(アジア司教協議会連盟)主催のアジア各国代表のシノドスチーム会議に、日本の代表者の一人として参加してまいりました。日本からは私も含め司祭3人と女性の奉獻生活者1人が参加し、全体としてはアジアの21の国から61人(枢機卿・司教・司祭・奉獻生活者(信徒)が集まって行われました。

2021年から始まったシノドスの歩み―「キリストとともに、また全人類に結ばれて、神の国へ向けて、キリスト者とともに歩む旅だ」ということ。また、宣教を志向したもので、(中略)：互いに耳を傾けること、対話、共同意識、キリストが聖霊のうちに生きておられることの表れである合意形成、分担された共同責任のもとでの意志決定で成るもの―は、2024年10月の世界代表司教会議第16回通常総会をもって終わることはありませんでした。むしろシノドスの歩みはこれから続くものであることが示され、第16回通常総会の時、承認された最終文書を各教会共同体が受け止め、皆でより深くキリスト



この流れの中で、2028年10月にバチカンで、「世界各地の教会が今どのような歩んでいるのか」を分かち合う教会総会(エクレシアル・アセンブリー)が開かれることになっていきます。今回の集まりではアジア各国における現在までのシノドスの歩みを全体会や

2027年 長崎大司教区100周年と WYD参加者のためのミサ

長崎大司教区は2027年7月16日、初の邦人司教が任命されてから100周年の節目を迎える。さらに同年8月には、韓国でのWYDソウル大会(本大会は8月3日、8日)の開催に伴い、長崎を訪れる多くの青年たちと出会う機会がある。

中村倫明大司教は10月16日、「長崎教区は、邦人司教設立100周年を迎えます。これからの長崎の歩みの一つとして、あらためて若者たちと向き

▼聖フランシスコ年に合わせ、世界の平和、特に核廃絶を願う祈りの巡礼

中村大司教は、「被爆マリア像とともに向かう平和巡礼がよい巡礼となるよう、何よりも「核兵器禁止条約」の第1回再検討会議が大きな前進をみることができるよう、特に被爆国である日本の政府が率先して、そして、世界の核兵器保有国も会議に参加してくださるよう祈りによってお支えください。もちろん、日本と核保有国の条約への署名・批准を願っています」と語っている。

障害者と共に 捧げる黙想会



9月23日(水)「障害者と共に捧げる黙想会」が行われ、32人が長崎市・さくらの里聖家族教会に集まった。朝の祈りを唱え、瀬戸高志師(レデンブートル会)の講話が行われた。

9月23日(水)「障害者と共に捧げる黙想会」のため、いのちを守るために、いのちを見つめることができるかを考える祈りの時となった。

講話を受け、当日のミサの朗読箇所と式文を用いた分かち合いがグループに分かれて行われた。午後はロザリオの祈りとゆるしの秘跡、午前に分かち合ったことを踏まえてグループごとに共同祈願を作成し、自分と世界とのつながりを思い



被爆マリア像が渡米するのは核拡散防止条約再検討会議が開催された2010年以来、16年ぶり2回目のこととなる。

白浜満司教の 退任願いを受理

広島教区の白浜満司教が聴覚障害の悪化を理由に今年3月に提出していた退任願いがこのほど、教皇レオ14世に受理されたことが分かった。

広島教区は9月22日

(火)、「霊的花束への感謝と新しい司教選出に向けてのお祈りのお願い」と題する白浜司教の文書を公開。これによると、9月21日(月)に行われた「教区の日」行事のミサの終わりに、駐日教皇大使フランシスコ・エスカランテ・モリーナ大司教から、退任の意思表示に

対する教皇レオ14世の声明が通知されたという。白浜司教の退任願いは、教皇レオ14世に正式に受理され、同時に、「信徒への司牧的活動が途切れることなく行われて教区の管理が円滑に維持されるよう、後任者の任命および教会法上の着座式が行われるまで、白浜司教は

通常の司教としてその職務を継続する。白浜司教は文書の結びに、「これから教区を導く新しい司教様を選出する手続きが進められていきます。新しい司教様の一日も早い任命と着座のために、皆さんのお祈りをお願いしたいと思ひます」と呼びかけている。

ながら感謝のミサで各自の思いを奉納し共同祈願を捧げた。

合同には、各自が取り組んでいる、熊本で被災した障害者の支援や、手話通訳者を手配するための支援など、連帯のためのアナウンスが行われた。共に祈り、共に食べる、喜びの日だった。

教区福祉委員会
委員長 宮原大地

合うことも考えていきたいと思います」との意向を示し、WYDソウル大会に参加できない青年たち、また同大会に合わせ長崎を訪れる世界の青年たちとの合同ミサを、2027年8月1日(日)16時から浦上教会(司教座聖堂)で開催するとした。そして、初の邦人司教が任命され邦人司教区が目が、感謝と祈りに満ちたものとなるよう願う。

「2025聖年」と「聖フランシスコ年」の恵みのときに続き、長崎教区が迎えようとしている節目がある。「殺す」だの「死ね」だの相手の人格や命を冒瀆する言葉を平気で吐いている場面に時々遭遇しとても悲しくなる▲暴力的なゲームやアニメあるいは大人の影響だろうか。こんな言葉は絶対に使ってはいけない、とは教会の子どものための約束である。ではなぜ「そういうこと」を言っているのか▲私たちに尊厳を与えてくださった神を悲しませることになるというのが一番の理由であり、時に相手の心を殺してしまうことにもなる。「殺してはならない」という掟は肉体的な命のことだけを言っているのではない。言葉をもって、あるいは心の中で命を奪ってはいないか▲我々は主の復活を告げ知らせる使徒である。絶望ではなく希望を伝える者である。「わたしは復活であり、いのちである」(ヨハネ11:25)と仰せになったイエス・キリストを世に示しながら、一人ひとりの命の尊厳が守られるように務めていかなければならない▲主イエスご自身が模範を残されたように、我々の発する言葉が隣人に希望を与え、笑顔にし、生きる力を与えるものとなるように祈っていききたい。(本)

★ほしかげ★
11月は死者の月である。▲昨今のコンプライアンスの観点からすればいささか過激かも知れないがどうしても気になることがある。▲「殺す」だの「死ね」だの相手の人格や命を冒瀆する言葉を平気で吐いている場面に時々遭遇しとても悲しくなる▲暴力的なゲームやアニメあるいは大人の影響だろうか。こんな言葉は絶対に使ってはいけない、とは教会の子どものための約束である。ではなぜ「そういうこと」を言っているのか▲私たちに尊厳を与えてくださった神を悲しませることになるというのが一番の理由であり、時に相手の心を殺してしまうことにもなる。「殺してはならない」という掟は肉体的な命のことだけを言っているのではない。言葉をもって、あるいは心の中で命を奪ってはいないか▲我々は主の復活を告げ知らせる使徒である。絶望ではなく希望を伝える者である。「わたしは復活であり、いのちである」(ヨハネ11:25)と仰せになったイエス・キリストを世に示しながら、一人ひとりの命の尊厳が守られるように務めていかなければならない▲主イエスご自身が模範を残されたように、我々の発する言葉が隣人に希望を与え、笑顔にし、生きる力を与えるものとなるように祈っていききたい。(本)

アッシジの聖フランシスコ 帰天800周年 特別聖年の集い

9/22 本河内教会 歌とお話しとミサ

9月22日(火)、教皇レオ14世が今年をアッシジの聖フランシスコ没後800年の特別聖年に定めたことを受け、本河内教会において、歌とお話しとミサの集いが行われました。



シスコの書き物や生涯における特徴的な出来事とそれにまつわる歌を通して、「あたたかくへりくだるイエスさまのところに生かされたフランシスコの姿に倣い、今度はわたしたちがそれぞれの場でそのあとをたどることが大切だ」とお話ししました。

(本河内教会)



シスコの書き物や生涯における特徴的な出来事とそれにまつわる歌を通して、「あたたかくへりくだるイエスさまのところに生かされたフランシスコの姿に倣い、今度はわたしたちがそれぞれの場でそのあとをたどることが大切だ」とお話ししました。

歌とお話しに続いて帰天800年の記念ミサが行われ、フランシスコの取り次ぎによって参加者がそれぞれの思いを祈りにしてささげました。

10/4 浦上教会 講演とミニコンサート 長崎中地区評議会主催

聖フランシスコ年の今年、聖フランシスコの祝日にあたる10月4日(今年は主日)に、長崎中地区評議会主催の「講演とミニコンサート」が14時から16時まで浦上教会聖堂で行われた。

この日に合わせ浦上教会ではアッシジの聖フランシスコと聖クララの聖遺物が祭壇近くに展示され、集いや主日のミサを訪れた人々は聖遺物を前に平和への思いを新たにしました。

10/3 本河内教会 トランジトゥス(帰天祭)

800年前の同じ日と同じ曜日に当たる10月3日(土)の午後2時から、アッシジの聖フランシスコのトランジトゥス(帰天祭)が本河内教会で行われた。



歌と祈りとお話という副題が付けられたトランジトゥスでは、聖フランシスコの遺言が朗読され、その合間に谷崎新一郎師が作詞作曲した4つの曲、聖人に関する歌が山口雅稔師のギター伴奏で歌われた。祭壇前には、聖フランシスコが受けた5つの聖痕を表す5つのろうそくでもされた修道服が飾られた。

お話しの中で、山口師は遺言の最初に出てくる聖フランシスコの言葉を引用し、その中でも「何も自分のものとせず」という清貧について説明した。無所有とも言える聖人の言葉は、すべてを神様のものとするを意味し、私たちが偉くなることはできなくなる。すなわち神様の前で完全な自由を得ることになる。全世界で魅了され続ける聖フランシスコであるが、聖人が心を奪われ魅了され続けられた相手はイエス・キリストであった。

集いの最後に、聖フランシスコの聖遺物で荘厳祝福がなされ、この日に集まった約100人の信徒、修道者は、聖フランシスコが残した、心があたたかくなる遺産を胸に帰路に就いた。

(本河内教会)

教区平和推進委員会・「聖フランシスコ年」記念企画 講演会 アッシジの聖フランシスコと平和

十字軍の時代であっても武力に頼らず、敵対する相手(スルタンなど)のもとへも「丸腰」で赴き、対話と和解を試みたというアッシジの聖フランシスコ。そんな聖人の姿に学びながら、現代社会において私たちが主の「平和の道具」となれるよう、一緒に考え、祈りたいと思います。

日時 2026年11月15日(日)13:30～ 入場・参加無料

場所 カトリック長崎大司教館・3階第1会議室

★オンラインからも参加できます。

<https://x.gd/zW7f2> からご登録ください。コチラ

講師 古里 慶史郎 神父(フランシスコ会)

主催 カトリック長崎大司教区 平和推進委員会

《問い合わせ先》peace.archdiocese.nagasaki@gmail.com



下口 勲師が引退

54年間にわたり司牧に専念された下口勲神父が10月15日に引退した。これまでの奉仕に感謝するとともに、これからの健康を祈りたい。

2026年度 第2回 司祭評議会

9月28日(月)10時から大司教館で行われた。

【報告事項】

① 邦人司教誕生100周年にあたり、2027年11月3日(水)浦上教会で記念ミサを行う。この節目を再確認と再出発の機会にした。

② 来年8月にWYDソウル大会が開催される。8月1日(日)16時から浦上教会で、諸外国の青年たちとのミサをささげる。

③ 100周年に向け「長崎教区・帰天聖職者の紹介」を作成予定。関係する各教会で、命日など記念日に掲示してほしい。

④ 永井隆・緑夫妻の列福運動の準備を進めている。

⑤ 霊における会話を通して、分かち合いにより宣教する教会の姿勢を探るよう努める。

【承認事項】
① 雲仙教会聖堂の再建 1981年6月献堂の雲

略歴
1945年6月29日新上五島町生まれ。桐教会出身。72年3月20日浦上教会で司祭叙階。同年4月大浦助任、75年教区長秘書、78年丸尾主任、88年褥崎主任、94年仲知主任、2001年深堀主任、07年平戸口主任、09年福江主任、15年大浦主任、21年から島原主任。

人事異動・任命

()は前任地、()は備考など

▼教区(10月15日付、11月16日付)

下口 勲師 引退

(島原主任)

葛嶋 秀信師 島原小教区管理者(1)

(教区本部事務局長兼務)

① 邦人司教誕生100周年にあたり、2027年11月3日(水)浦上教会で記念ミサを行う。この節目を再確認と再出発の機会にした。

② 来年8月にWYDソウル大会が開催される。8月1日(日)16時から浦上教会で、諸外国の青年たちとのミサをささげる。

③ 100周年に向け「長崎教区・帰天聖職者の紹介」を作成予定。関係する各教会で、命日など記念日に掲示してほしい。

④ 永井隆・緑夫妻の列福運動の準備を進めている。

⑤ 霊における会話を通して、分かち合いにより宣教する教会の姿勢を探るよう努める。

【承認事項】
① 雲仙教会聖堂の再建 1981年6月献堂の雲

第2回 教区顧問会

9月28日(月)13時から大司教館で行われた。

【承認事項】

① 雲仙教会聖堂の再建 1981年6月献堂の雲

② 2027年度の諸委員会再編
現在ある11委員会の再編に向けて関係者の意見を聞いた上で、次回の司祭評議会にて審議する。

③ カトリックセンター跡地の活用
センター跡地を、新規活用が始まるまで貸駐車場とする。

④ 小教区助成金支出の個別対応
現行では上限は年額120万円であるが、今後財政的に限界を迎える小教区に対してなど、顧問会において個々の申請を検討し、対応する。

⑤ カトリック諫早教会納骨堂建設
同教会は諫早純心幼稚園のつぼみ棟を購入し、納骨堂へ改修する。

⑥ カトリックセンター跡地の活用の再検討
センターは解体する。跡地の新規活用については顧問会で検討し、再度、司祭評議会に諮る。

マイホームの美容と健康に！
(有) 山 川 塗 装
有限責任中間法人 全国住宅火災防止協会
長崎県建物営繕工事業協同組合理事
代表取締役 ペトロ 山川 進
佐世保市原分町1715-5
TEL(0956)49-3330 FAX(0956)49-8729

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
**たつみ産業株式会社
西田商事株式会社**
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL (0956) 31-8268

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー(株)
代表取締役 ミカエル 溝口 昭彦
〒858-0926 佐世保市大湊町511番地3
TEL(0956)47-4380

主の平安
五島式典社(齋場) 五島中央会館
代表取締役 ヨゼフ 浦 昭
24時間営業
五島市上津町 1385 番地 1 TEL (0959) 74-5551
FAX (0959) 74-5552
五島市奈留町浦 1899-1 TEL (0959) 64-3101
FAX (0959) 64-3102

相続登記はお済みですか
土地・建物・会社・法人の登記手続 相続手続
遺言書の作成 相続土地の国庫帰属手続 など
まずは、お電話を!!
司法書士 行政書士 山下 緑 事務所
ミカエル 山下 緑
〒854-0014 諫早市東小路町10-21 電話 0957-22-6177

赤城墓地
小家族様
分譲中
長崎石彫 岩永
095-862-2469

2 年に一度の「長崎青年の日」 交流と 2027 WYD へ 心づもりの時過ごす

青少年委員会は 9 月 21 日 (月) から 22 日 (火) をテーマとしたこの企画に、青年 15 人とスタッフ 13 人が参加し、長崎市内町のお告げの MARIA 修道会サンタマリアの家を拠点に、青年たちの交流と 2027 WYD (ワールドユースデー) への心づもりの時を過ごした。



点に、青年たちの交流と 2027 WYD (ワールドユースデー) への心づもりの時を過ごした。大司教館に集合した参加者は、グループ別に浦上周辺のカトリック関連史跡を巡る徒歩巡礼を行い、如己堂横にある帳方屋敷跡をはじめ、この地に生きた信徒の信仰のしるしを探す喜びをいただいた。サンタマリアの家に移動し、皆で「テゼの祈り」をささげ、夕食の後のレクリエーションではフルーツバスケットを参考にした「なんでもバスケット」を行い、互いの霊名や出身地、特技などを楽しく時間とった。

教区青少年委員会
委員長 川端志範

長崎カトリック神学院 3 階に 引退司祭居室を整備

引退司祭生活支援委員会 (通称・トピア会、委員長・山脇守司教総代理)



が進めていた、引退司祭の居室整備工事がこのほど完了し、引き渡しが行われた。

場所は長崎カトリック神学院 (写真①) の 3 階。かつて 100 人を超える小神学生が寝室として利用していた大部屋を改修し、5 部屋を整備した。現在、小神学院には神学生 3 人が生活しているが、適度な住み分けも図られている。神学院校舎の中央にある吹き抜けにエレベーター (①) が新設され、階段には手すり (②)、居室にはバス・トイレが設置され、高齢の司祭方の生活に支障がないよう工夫されている。引退司祭の居室は、大司教館にも 6 部屋があり 3



人が居住しているが、司祭の高齢化が進む中、新たな居室が完成したこと、教区施設での引退生活を希望する司祭方に安心して生活場所を提供できることとなった。改修工事の費用は教区司祭が毎月積み立てているトピア会費によって、全額まかなわれた。

大会を支えた皆様に感謝

毎年恒例の司祭団ソフトボール

9 月 29 日 (火)、三大天使のお祝い日に毎年恒例の司祭団ソフトボール大会が開催された。今年は五島市丸木緑地公園に 36 人の司祭、神学生が集った。



下五島地区長・中田輝次師のあいさつと、廣田学新司祭の選手宣誓の後、試合開始。第 1 試合は長崎対佐世保・平戸。接戦の末、14 対 12 で長崎がリードを守り切って勝利。第 2 試合は、佐世保・平戸対五島。じりじり点差を狭めつつも逃げきって 5 対 6 で五島の勝利。地区女性部が腕を振るった昼食を挟んで、決勝戦は五島対長崎。空気を読めない五島のヒットが途切れず 12 対 3 で五島が勝利し、優勝を飾る。大きなけがもなく、大会は無事に閉幕した。

核なき世界基金
被爆地からのチャレンジ
みんなで
いのちと地球を守ろう！
<https://nuclear-free.net/>

鈴田牢跡での ミサ 水主町・植松

9 月 23 日 (水) 大村市の鈴田牢跡において、午前 10 時から殉教記念ミサが行われました。快晴の下で行われたミサには、水主町教会、植松教会を中心に信徒が集い、殉教者に思いをはせました。



鈴田牢は、奥行 5.3 幅 3.5 と非常に狭く、多いときで 33 人が収容されており、横になることはもちろん、自由に動くこともできなかったといわれています。この牢に閉じ込められた人々のうち、2 人は牢内で亡くなり、スピノラ神父ら 25 人は長崎の西坂で、フランコ神父ら 8 人は大村の放虎原で殉教しました。

ミサの前には、典礼委員から、鈴田牢に捕らわれた信徒たちが常に信仰心を持ち、苦しみの中にあっても折り続けたこと、危険を顧みず、見張りの目を盗み、水を届け、励まし続けた人たちがいたことなどが語られました。そして、彼らの信仰があつて今の私たちがあつて、今を生きることを忘れず、彼らの信仰心の強さを敬い、取り次ぎを願うことが呼びかけられました。

9 月 27 日 (日) 朝 8 時からカトリック神ノ島教会において高鉾島殉教祭が行われた。

高鉾島殉教祭 神ノ島



本来ならば高鉾島の目の前の港の土地の一部をお借りしてテントを立て、殉教地を臨みながらミサを行うのだが、今年はいくく天候となり、教会聖堂でミサを行った。小教区外からも参列してくださった方がいらつしやう。一方、港でミサを行うときは階段を上がってくることができないお年を召した信者の方々も参列するが、今年に残念ながら悪天候により参列者も例年より少なかった。

ミサの中では、司祭をかくまい、高鉾島で殉教し、205 人の福者 (福者セバスチャン・木村司祭と 204 殉教者、記念日は 9 月 10 日) にも加えられて、いるガスパル・上田彦次郎とアンドレア・吉田の信仰と司祭を大切にすることを思い起こした。私たちが、先祖から受け継いでいる信仰を次の

聖トマス西と 十五殉教者記念ミサ 中町

9 月 27 日 (日)、中町教会で小教区主催による「聖トマス西と十五殉教者記念ミサ」が中村倫明大司教様司式で執り行われた。その日は雷を伴う大雨のため、庭園で予定



世代や周りの人々に伝えていく福音宣教者になることができるように、この日中町教会で記念された 16 聖人 (聖トマス西司祭と 15 殉教者) も含めた殉教者たちの取り次ぎを願ひ、祈りをささげた。

「聖トマス西と十五殉教者記念ミサ」が中村倫明大司教様司式で執り行われた。その日は雷を伴う大雨のため、庭園で予定されていた献花は、聖堂の祭壇横で行われた。大司教様はミサの冒頭に「殉教者は、司祭、修道者、そして彼らを助けた信徒の皆さんで、日本人 9 名、スペイン人 4 名、

さつを促し、皆が笑顔であいさつを交わす場面もあり、温かい雰囲気でのミサが始まった。大司教様は、当初準備した説教に代えて、当日の『聖書と典礼』の掲載文「祈りは、私たちを通して実を結ぶ」という大元麻美さんのコラムを霊的な糧として分かち合われた。大元さんは、カトリック新聞社において、特に弱い立場の人や小さな人々に関わる社会正義の分野を担当され、大司教様とも面識があると紹介された。大元さんは 16 年前、在留資格の更新に必要な身元保証人が見つからない移住者のために必死で祈った。しかし支援者が現れず、自分が保証人になれば祈りが実現するのだと気づいた。『祈りが自分の手を汚さずにかたうことを望んでいた』と内省し、それが信仰の転換点になったとい

う。『あなたの祈りはわかった。では、あなたはどうするか』と、イエスの呼びかけを感じます。(中略) 神に助けを願う祈りは、同時に神からの問いかけを受け取り、自らの一歩を踏み出すことではないかと感じています」と。大司教様は「今日私たちが祝っている聖トマス西と 15 殉教者は、主とともに働いた人々でした」と語り、最後は「主よ、私の手をお望みでしたら、今日、私のこの手をお使いください」と歌で説かれた。

ミサの終わりに、大司教様は、屋外で大雨の中、奉仕された方々やミサに参列された方をねぎらわれた。同殉教祭は、来年は列聖 40 周年の節目の年となるため、長崎南地区行事として行われる。

9 月 12 日、派遣先のア



アウグスチノ・ロバート・ペラミノ
北島 泰治 神父
(神言修道会)

2 年前にがんを患い、入退院を繰り返していたが、穏やかな笑顔は最後まで絶えず、司祭、神学生、姉妹たちや信徒に温かい言葉をかけ、励まし続けた。1 年前の記念誌には「すべての姉妹方に、すべての出来事に心から感謝いたします。神様が私の足りないところを補ってくださいます。すべては神様のなさることです。本当にありがとうございます」と言葉を残した。葬儀ミサ・告別式は 9 月 16 日、十字修道院チャペルで行われた。



田川 文子 修道女
(お告げの MARIA 修道会)

9 月 14 日逝去。71 歳。長崎市生まれ。1980 年初誓願、86 年終生誓願。22 歳の時に入会し、誓願して保育士、調理師として下五島の福祉施設で働いた。約 30 年間、長崎、福岡の大司教館、上五島や長崎市内の小教区で司祭館奉仕を行った。

長崎でカテキスタの集い

全7地区から120人以上が参加



の集い」が開催された。

全7地区から120人以上の参加者が集まった。「召命」というテーマのもと、午前中は、諫早教会主任司祭で、教区召命委員長の辻原達也神父の講演が聖堂で行われた。

9月21日(月)、長崎カトリック神学院において、長崎教区信仰教育委員会カテキスタ養成部門の主催する「カテキスタ

「ともにあゆむ」を発行

2027年家庭委員会カレンダー

教区家庭委員会では、今年もまた、家庭内福音宣教の一環として「ともにあゆむ」と題したカレンダーを制作いたしました。

今年もまた、家庭内福音宣教の一環として「ともにあゆむ」と題したカレンダーを制作いたしました。今回で10回目の発行となり、絵は平戸市出身の信徒の方にお願しました。

表紙についてお尋ねしたところ、次のようにお答えいただきました。

「私にとってこの表紙の教会は、幼い頃から身近にあり、人生の節目を見



生を歩んでいく中で、人の営みを見守り、また、神様との絆を感じることで、できる、切っても切り離せない場所でもあります。

そして、多くのご家族にとつて結婚式は新しい人生や家族の歩みが始まる大切な節目の一つです。これから始まる一年の最初に人生の始まりを象徴する結婚式の風景を置くことで、家族とのつながりや人との縁、そしてこれから続いていく日々を大切にしたいという思いを込めて表紙としました」

販売方法は、従来通り各教会での取りまとめとさせていただきます。詳細は各小教区へのご案内をご確認ください。

《カレンダーに関する問い合わせ先》
黒崎教会
(下原和希神父)
Tel 0959・25・0007

いづつ園

感謝

司教・司祭・助祭追悼ミサ 11月10日(火)11時、赤城聖職者墓地。雨天時は浦上教会。

自死された方々のための追悼ミサ 11月28日(土)14時、西坂・聖フィリッポ教会。ゆりの会主催。

問合先・鳥巢シオリ
Tel 090・9488・7931

2024年元日に発生した能登半島地震の被災地では現在もボランティア活動が続いている。長崎からも神父、シスター、青年ら計6人が現地を訪問し、9月2日から5日まで活動に参加した。長崎教区神学生の森翔真さん(26)に感想を寄せていただいた。

能登半島へボランティア

コレジオと「のとなりに」

長崎教区神学生 森翔真

長崎コレジオで生活しております、森翔真と申します。このたび、神父様、コレジオ生とシスター、青年の方とともに6人で、今年9月、能登半島での災害ボランティア活動に参加しました。

方々がそこでの暮らしを少しずつ取り戻していくためのお手伝いをさせていただきました。

そこで被災された方々と実際に会い、その方々の痛みや思いに寄り添う機会が与えられました。今回は、その中で感じたことを、読者の皆さんと分かち合いたいと思います。

実際に現地に立つてみると、テレビやインターネットを通して見ていた「被災地」とは全く違うものがありました。そこには、一人ひとりの生活があり、思い出があり、大切に生きてきた家があり、そして今を懸命に生きていく人がありました。泥や水にまみれたであろう家具を運びながら、それが単なる「物」ではなく、その人のこれまでの人生や家族との思い出が詰まったものであることを感じました。また、災害による被害は、目に見えるものだけではなく、目に見えないと感じました。家や家具が被害を受けることはもちろんですが、そこには、それまで当たり前だった生活が突然変わってしまったことへの戸惑いや不安があります。そして、復旧までには長い時間が必要であり、目に見える形では分からない苦労も続いているのだと思いました。だからこそ、被災された方々の「今」の生活に目を向け、その方の歩みに寄り添うことが大切なのだと感じました。

カリタスジャパンのビブスを着けて、まず七尾教会を拠点として、水害の被害を受けた羽咋市へ向かいました。現地では、水に浸かって使えなくなった畳や箆、また泥などを運び出したたり、被災者のお家周辺に流れ着いた藁や稲などを集めたりし、集めたものを「仮置き場」という分別された場所へ運搬するなどして、被災された

その後は輪島方面へ移動し、大野町では傾聴ボランティアに取り組みしました。「じんのびカフェ」で実際に被災された方のお話を伺う中では、にこにこ笑顔でお話しされている姿がありました。その心の内には、被害の大きさだけではなく、それぞれの方が抱えている不安や悲しみ、これまで大切にしていたものを失った痛みなど、外からは見えにくい思いに触れることができました。そのような方のお話を聞いていると、何か気の利いた言葉をかけなければならぬのではない

かと思うこともありましたが、しかし、お話を聞く中で、必ずしもこちらから答えを出す必要はないのだと感じました。その方が語りたいことを語ることで、静かに耳を傾け、その思いを受け止めることも、一つの大切な支えになるのだと思いました。

そこで気づかされたのは、「寄り添う」ということは、必ずしも何か大きなことをしてあげることではないということです。ただその人のそばにいて、その人の話に耳を傾け、その人と同じ時間を過ごすことそのものが大切なのだと感じました。自分には相手の苦しみをすべて取り除くことはできません。でも、その苦しみを一人ですべて抱えなくてもよいように、そばにいて支えることができます。

今回名古屋教区でお世話になった、カリタスのとサポートセンター長の片岡義博神父様の叙階カードに記されていたという福音、「だがその人の隣人になったと思うか」(ルカ10:36参照)というイエス様の言葉も、活動を振り返る中で心に残っています。イエス様は、「わたしの隣人とはだれですか」と問うた人に対して、「だがその人の隣人になったか」と問い返されました。隣人とは、ただ自分の身近にいる人のことではなく、自分からその人のところへ近づき、ともに歩もうとするところにいると感じました。能登での活動を通して、私はこの問いを自分自身に向けられたように感じました。私は被災された方々の「隣人」になることができたのだろうか。何かをしてあげようと思って現地にいったけれど、実際には、私の方が被災された方々や現地で活動する多くの方々から、人と人が支え合うことの大切さを教えていただいたのではないかと思います。

能登には、今も多くの方々がさまざまな形で支えに入り、被災された方々とともに歩んでいます。「のとなりに」―多くの人が能登の方々の隣に立ち、祈り、働き、支え続けています。その大きな体のような支えの中で、私自身ができたことはほんのわずかな働きであったと思います。同時に、今回の経験をを通して、奉仕すると

は、自分の力を誰かに与えることだけではないのだと感じました。奉仕する中で、私自身も多くのものを受け取っています。人の温かさ、支え合うことの大切さも、苦しみの中にも希望を失わずに歩もうとしている姿も。それは、目の前にいる一人の人を大切にすることの意味を、身をもって教えていただいた経験でした。

教会もまたそのような「隣人となる」ことを大切にする共同体なのだと思います。教会は建物の中だけにあるのではなく、苦しんでいる人、悲しんでいる人、孤独を感じている人のところへ向かい、ともに歩むところに、その使命が現れるのではないのでしょうか。カリタスの活動を通して、教会が社会の中で果たす役割についても改めて考えることができました。教会が誰かの隣人となるためには、特別な人だけが働くのではなく、一人ひとりが自分ができることを持ち寄ることが大切なのだと思います。今回、コレジオ生やシスター、青年、神父様と一緒に活動できたことも、そのことを感じる機会となりました。それぞれにできることは違っても、「一緒に働くこと」で、一つの支えとなることができました。

今回の能登での経験は、単なるボランティア活動の一つではなく、私自身の信仰を見つめ直す機会ともなりました。誰かのために何かをするということ以上に、目の前にいる人を一人の大切な人として受け止める、その人の隣人となること。そして、その出会いの中にキリストがおられることを忘れないこと。その大切さを教えていただきました。

能登で出会った方々のために祈り続けるとともに、私自身も、目の前にいる人の隣人となることのできるキリスト者でありたいと思います。そして、どこにいても、誰かの痛みや苦しみに心を寄せ、ともに歩むことのできる教会の一員として、少しずつでも歩んでいきたいと思います。

※「のとなりに」は名古屋教区カリタスのとサポートセンターが行っているキャンペーンの名称です。